



新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



第23回新藤兼人賞

2018年12月7日(金) 如水会館 オリオンルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：東京テアトル株式会社

協賛：松竹株式会社/東宝株式会社/東映株式会社/株式会社KADOKAWA/日活株式会社

日本映画放送株式会社/株式会社WOWOW/株式会社IMAGICA Lab./株式会社ファンテック

後援：文化庁

金 賞

野尻克己 監督『鈴木家の嘘』 監督・脚本



受賞者コメント

ご挨拶の前に、生前お世話になった黒澤満さんのご逝去を悼み、謹んでお悔み申し上げます。黒澤さんは、とてもカッコいい不良で優しいプロデューサーだと思って、僕が子供のころに観た作品を思い返してとてもカッコいい方だなと思っておりました。安らかにお眠りください。

続きまして、ご挨拶させていただきます。まずはこの場を借りまして、スタッフ、キャストにお礼を申し上げたいと思っています。『鈴木家の嘘』で映画監督になることができましたので、本当に感謝をしたいと思っています。加えて、今回の審査員の方々にも、私の作品を観ていただき、このような賞をいただきましたことを深く感謝いたします。本当にありがとうございます。賞というものはあまり貰ったことがないので、気持ちとしてはなんとなく喜んでいいのかなというのか、すごく緊張の方が勝っているのですが、とにかく嬉しく思っております。

新藤兼人監督の冠がついた賞をいただいたということは、やはりこれからが映画監督としてスタートラインに立ったということと同時に、新藤監督は生涯250本以上の脚本を書き、100歳まで監督をされていたということなので、僕には新藤兼人監督の背中を追いつつ抜かすという目標ができました。100歳まで映画を撮れるかどうかはわかりませんが、引き続き作品を撮っていきたくてお思います。どうぞ皆様、応援の方よろしくお願ひします。

受賞者プロフィール 1974年生まれ、埼玉県出身。東京工芸大学芸術学部映像学科を卒業後、映画業界に入り、熊切和嘉監督、豊田利晃監督、大森立嗣監督に師事。以降、橋口亮輔、横浜聡子、石井裕ら日本映画界を牽引する監督たちの現場で助監督を務める。チーフ助監督として参加した作品に、熊切和嘉監督『青春金属バット』(06)、『フリージア』(07)、『海炭市叙景』(10)、大森立嗣監督『ケンタとジュンとカヨちゃんの国』(10)、『まほろ駅前多田便利軒』(11)、『まほろ駅前狂騒曲』(14)、『セトウツミ』(15)、横浜聡子監督『ウルトラミラクルラブストーリー』(09)、武内英樹監督『テルマエ・ロマエ』(12)、『テルマエ・ロマエII』(14)、石井裕也監督『舟を編む』(13)、橋口亮輔監督『恋人たち』(15)など多数。自ら手がけたオリジナル脚本によって本作で長編劇映画監督デビューを飾る。

銀 賞

関根光才 監督『生きてるだけで、愛。』監督・編集



受賞者コメント

新藤兼人賞、銀賞いただき本当にうれしい限りで、審査会の皆様、関係者、皆様ご一同に感謝を申し上げたいと思います。『生きてるだけで、愛。』という作品については、3年ほど前にスタイルジャムの甲斐プロデューサーと出会うことができ本当に感謝しております。そこから紆余曲折色々ありましたが、3年ほどかけて映画ができ、その痛みを共にして、一緒に最後まで完成にこぎつけてくださった趣里さん、菅田さんはじめ素晴らしいキャストの皆さんと、本当に優秀な素晴らしいスタッフの皆さんに改めて感謝をさせていただきたい。私個人としては、映像という業界に入って10年以上経ちますが、本編映画はこの映画をきっかけとしてのことなので、本当にまだまだ若輩ものです。そういった人間が、新藤兼人監督の名前を冠した賞をいただけるということは本当にありがたく光栄です。

『生きてるだけで、愛。』という映画は、精神的に困難なことを抱えている人を描いた映画です。賛否両論がすごくあるだろうし、共感できないという人も沢山いるだろうと思っていたのですが、多くの方からメッセージを頂戴し、深く共感いただいていることに正直とても驚きました。それほど、今の日本社会というのは、特に若い方にとっては閉塞感があるのかも知れませんが、どこかでそれを打ち破るような勇気や希望など、そういうことを映画から感じ取っていただけた。自分自身も映画によって人生を変えられた人間ですから、そういった映画にこうしたインディペンデントというスピリットを継承させていただけることをありがたく思っています。叱咤激励される思いで、賞の名に恥じぬようこれからも頑張る映画を作り続けていきたいと思っています。よろしくお願いします。

受賞者プロフィール 1976年生まれ。東京都出身。2005年に短編映画『RIGHT PLACE』を初監督し、翌年カンヌ国際広告祭のヤング・ディレクターズ・アワードにてグランプリを受賞。以降、数多くのCM、ミュージックビデオ等を演出し、2012年短編オムニバス映画『BUNGO～ささやかな欲望～』では岡本かの子原作『鮫』を監督。2014年の広告作品 SOUND OF HONDA『Ayrton Senna 1989』ではカンヌ国際広告祭で日本人初となるチタニウム部門グランプリ等、多数の賞を受賞。国際的にも認知される日本人監督となる。本作が初の長編劇場映画監督作品となり、2018年9月には長編ドキュメンタリー映画『太陽の塔』も公開。現在は国内外で活動する傍ら、社会的アート制作集団「NOddIN」でも創作を続けている。

プロデューサー賞

市橋浩治氏『カメラを止めるな!』プロデューサー



受賞者コメント

本日はプロデューサー賞をいただきまして誠にありがとうございます。ご紹介いただきました通り『カメラを止めるな!』はENBUゼミナールのワークショップから生まれた映画です。当初は6日間のイベント上映だけで終わる予定でしたが、評判がよくて6月23日から新宿、池袋の2館から始まって、最終340館を超える映画館で興行いただいております。数字は先ほどご紹介いただいたような数字ではございますが、ひとえに我々だけの力ではなくて、アスミック・エースの豊島さんはじめ配給会社、宣伝の方、劇場の皆様などの努力や応援のおかげでここまで来れたと思っています。私自身は、映画のプロデューサーというよりは、この映画を作るための場を作るプロデューサーかなと思っていますが、映画製作については上田監督が中心となって、キャスト、スタッフ全員の力で出来上がったものだと思います。この映画を作ったもとの理由に、新人監督の上田君とこれから世に出たいという役者の皆さんと一緒に映画を作って、業界の方々に知っていただきたいというのがありましたので、皆さんには本日来場しているキャストとも色々お話をさせていただけるとありがたいと思っております。あと、この映画は豊島さんを含めた配給会社さんのおかげというのがありますが、実際、観ていただいたお客様のSNSはじめ、試写や劇場で御覧いただいた業界の皆さん、監督、俳優、タレントの皆さんからの沢山の応援コメントいただき、これは全て無償でいただいているもので、そういった皆さんからの応援があったからこそ拵がったと思っております。受賞に感謝しております。どうもありがとうございました。

受賞者プロフィール 1964年福井県生まれ。大学卒業後、主に大学や専門学校、スクールの広告営業マンとして15年勤務し、2002年よりENBUゼミナールの運営に関わる。2009年にENBUゼミナールのための会社を自ら設立し代表となる。ndjc2009『アンダーウェア・アフェア』（岨手由貴子監督）には制作会社として参加し、初プロデュース作品となる。2011年よりシネマプロジェクトを立ち上げ、これまでに『あの女はやめとけ』『オチキ』『サッドティーン』『うるう年の女』『なけもしないくせに』『退屈な日々にはさようならを』など話題作をプロデュースしながら、若手監督や俳優を発掘。『カメラを止めるな!』はシネマプロジェクト第7弾として制作したものである。2018年シネマプロジェクト第8弾として、柴田啓佑監督『あいが、そいで、こい』と二ノ宮隆太郎監督『お嬢ちゃん』を制作し、今後国内外映画祭および劇場公開を目指している。

プロデューサー賞

上田慎一郎氏『カメラを止めるな!』監督・脚本・編集



受賞者コメント

この賞をいただいたときに、プロデューサー賞ということで、えっと思ったのですが、公式サイトにプロデューサー賞の定義として「作品に貢献した人、もしくはプロデュースしたといえる企画者」と書いてあるのをみて気持ちが落ち着きました。僕は、24の頃から本格的に映画制作をはじめ、10年間にわたり、インディーズ映画、自主映画を作ってきました。自主映画というのは殆ど監督がプロデューサーを兼ねているようなものなので、予算は自分のポケットマネーを切り崩して、自分でスケジュール管理をして、スタッフィングしてという風に作ってきました。時々、ぽっと出の新人とかシンデレラストーリーとか書かれることがあります。そうシンデレラでもないよ?という気持ちはあります。10年間はほんとにひたすら信じて映画を作ってきたので、その10年があつての今日だと思っています。今回の『カメラを止めるな!』に関しては、作品そのものだけでなく、作品の成り立ちや、その後の展開などの現象ひっくるめて評価いただいたのかなと思っています。宣伝も、宣伝部がなかったため、キャストスタッフ総出で、ピラ配りをしてSNSで発信等続けてきました。大きさにいって、宣伝もエンタテイメントで、もっといって、作品の一部だと思っています。作品を作る人と作品を届ける人の間に距離があると、ちょっとうまくいかないことが多くなっていくのですが、今回は、作る側と届ける側がゼロ距離でした。同じ人たちがやっていました。ただ単に宣伝をするだけじゃなくて60日前から、スタッフキャスト総勢60人で公開前カウントダウンのようなことをやり、公開から100日以上一日もかかさず舞台挨拶を行いました。それも、写真とか動画、全員撮影OKにしてSNSで発信をしてくださいと。これも大きな映画とやはりできないことだと思います。あと、TOHOシネマズさんで拡大公開が決まった8月3日は、本当にワンシーンしか出てない俳優も一緒に16-17人舞台挨拶に立たせていただきました。こういうことはなかなかないと思います。そういうことも含めて「カメ止め」らしい宣伝をやっていたということで、作り手側と届ける側の距離がなくやれたことが成功として大きかったのかなと思います。先ほど市橋さんも言ってましたが、作ったのは僕たちですけども、観てくれた方が一緒になって応援してくれたというのも本当に大きいので、この賞をスタッフ、キャスト、そしてファンの皆様と一緒に受け取りたいと思います。ありがとうございました。

受賞者プロフィール 1984年 滋賀県出身。中学生の頃から自主映画を制作し、高校卒業後も独学で映画を学ぶ。2010年、映画製作団体PANPOKOPINAを結成。現在までに8本の映画を監督し、国内外の映画祭で20のグランプリを含む46冠を獲得。2015年、オムニバス映画「4/猫」の1編「猫まんま」の監督で商業デビュー。妻であるふくだみゆきの監督作「こんぶれっくす×コンプレックス」(2015年)、「耳かきランデブー」(2017年)等ではプロデューサーも務めている。「100年後に観てもおもしろい映画」をスローガンに娯楽性の高いエンタテイメント作品を創り続けている。『カメラを止めるな!』が劇場用長編デビュー作となる。主な監督作:短編映画「ナポリタン」(2016年)、「テイク8」(2015年)、「Last Wedding Dress」(2014年)、「彼女の告白ランキング」(2014年)、「ハートにコブラツイスト」(2013年)、「恋する小説家」(2011年)、長編映画「お米とおっばい。」(2011年)

プロデューサー賞

豊島雅郎氏『カメラを止めるな!』ENBUゼミナールとアスミック・エース共同配給



受賞者コメント

本当に光栄な賞をいただきありがとうございます。本日この賞をいただきましたのは、まずはここにおりますプロデューサーの市橋さん、上田監督、そして今日来ていただいているスタッフ、キャストの皆さん、そして先ほどから話に出ていますTOHO シネマズさんも来ていらっしゃるんですが、興行の皆さん、そして、とにかく今までできなかったことをやろうということで、一緒にやってくれたアスミック・エースのスタッフのみんな、そして、関係者、ファンの方々、そしてその熱量に心動かされて人から人に伝えてくださったこの映画のファンの皆さんにほんと感謝したいなと思っております。この映画に関わらせていただいて7月から8月、飲み屋で隣の人がこの映画がいかにも面白いかという話をしていたことが3回くらいありました。宣伝文句のように「中身は言えないんだ!だから、絶対に観にいった!」という熱い語らいを直に目撃して「ああ、やっぱり映画ってこうやって、映画だけじゃないと思いますけども、流行っていくものっていうのはこういうことなんだなあ」と身をもって実感させていただきました。市橋さん、上田さんから、最初5千人を目標に2館で始めたと言われておりましたが、それが223万人に届けられた、それが実際に起こりうるということが実証されただけでも本当に良かったと思っています。今日ここにいる皆さんは、インディペンデント映画を扱っているプロデューサーやその関係者が多いと思いますが、皆さんと共に私自身もまたこういったことで世の中を揺さぶることができればと思っていますし、また、ここにいる皆さんとこれからの作品で一緒にできればと思っています。(来場のキャスト曾我さんに舞台挨拶に立った回数について質問。曾我さんから初日の6月23日から劇場に通った回数でいうと135日間という返答があり)曾我さんのように劇場に135回通って舞台挨拶に参加されたという、舞台挨拶の回数はもっとだと思いますけど、お金ではなく、その熱量が映画をヒットさせる原動力になったとわかりましたし、ここにいる皆様にもご理解いただけたのではないかと思います。ぜひ、これから面白い映画を作って、映画産業が日本のエンターテインメントの中核になるように、皆さんとまた一緒に活動していければと思っています。本日はどうもありがとうございました。

受賞者プロフィール 千葉県出身。大学卒業後、アスミック(現アスミック・エース)に入社。主な製作・プロデュース作品に、『ピンポン』(02/曾利文彦監督)、『真夜中の弥次さん喜多さん』(05/宮藤官九郎監督)、『間宮兄弟』(06/森田光光監督)、『ハチミツとクローバー』(06/高田雅博監督)、『鉄コン筋クリート』(06/マイケル・アリアス監督)、『ハンサム★スーツ』(08年/英勉監督)、『大奥』(10/金子文紀監督)、『ノルウェイの森』(10/トラン・アン・ユン監督)、『ヘルタースケルター』(12/蜷川実花監督)、『のぼうの城』(12/犬童一心・樋口真嗣共同監督)、『陽だまりの彼女』(13/三木孝浩監督)、『MIRACLE デビクロくんの恋と魔法』(14/犬童一心監督)、『エヴェレスト 神々の山嶺』(16/平山秀幸監督)、『3月のライオン 前編・後編』(17/大友啓史監督)、『羊の木』(18/吉田大八監督)等がある。

日本映画製作者協会 特別賞

黒澤 満 氏



協同組合日本映画製作者協会・特別賞 について

1996年から始まりました「新藤兼人賞」も本年で23回目を迎えます。本来は、その年の優れた新人監督に贈られる「金賞」「銀賞」、また、その年の優秀な作品の完成に貢献を果たした映画製作者に「プロデューサー賞」が贈られるのですが、本年は特別に〈協同組合日本映画製作者協会・特別賞〉を設け、株式会社セントラル・アーツの黒澤満氏に贈呈することとなりました。黒澤氏は1955年、日活に入社。1977年に日活を退社後、セントラル・アーツを設立されました。『最も危険な遊戯』から始まる「遊戯シリーズ」や、『野獣死すべし』、テレビドラマ『探偵物語』など一連の松田優作作品、『ビー・バップ・ハイスクール』シリーズ、『あぶない刑事』シリーズ、角川映画、テレビドラマ、「東映Vシネマ」など多数製作し、その作品群は枚挙に暇がありません。黒澤氏は穏やかで人望も厚かったことから、セントラル・アーツから育った映画スタッフも数知れません。今日に至る日本映画界の激流を“柔らかな剛腕”で乗り越えてこられた業績を讃え、敬意を表して〈協同組合日本映画製作者協会・特別賞〉を贈ります。

日本映画製作者協会 理事 梶井省志(アルタミラピクチャーズ) / 坂本忠久(コンティニュー)

受賞者プロフィール 株式会社セントラル・アーツ取締役社長。

1933年生まれ。1955年日活入社。新宿日活営業係を経て1958年に梅田日活の支配人に抜擢される。1963年、名古屋日活の支配人として異動するが、再び梅田日活の支配人に復帰。1969年、日活関西支社宣伝課長となる。1970年、俳優部次長として製作の現場に呼ばれ、その後映像本部長室長に就く。1971年、日活がロマンポルノ路線へと転換して以降、その企画製作の中核として多くのロマンポルノ作品をプロデュースする。1972年に企画製作部長、1973年に撮影所長に就任。1977年、日活を退社した後、同年に東映が新たに立ち上げた東映セントラルフィルム（のちにセントラル・アーツ）のトップに招聘され、翌年公開の第1回作品『最も危険な遊戯』が話題となる。娯楽性に満ちたプロデュース作品は200本以上に及び、2018年は『終わったひと』が公開された。2007年、文化庁映画賞映画功労部門で受賞。2012年、毎日映画コンクール特別賞受賞。

審査総評 審査委員長 進藤淳一（フィルムフェイス）

2018年度の新藤兼人賞は、2017年12月から2018年11月までに日本国内で劇場公開された作品のうち、公開本数が3本以内の新人監督作品185本が選考対象となりました。対象作品数は過去最多となりましたが、ドキュメンタリー作品が増えたように感じました。審査員が手分けをして観る1次選考を経て、2次選考からは全員が観て判断しました。今年も粒ぞろいで、力のあるおもしろい作品がたくさんあり、審査会はかなり白熱しました。おかげで、審査員の意見が分かれ、最終審査会では決まらず、日を改めて本賞創設以来の「再・最終審査会」が開かれました。最終的に野尻克己監督『鈴木家の嘘』と関根光才監督『生きてるだけで、愛。』が金賞、銀賞に選ばれました。どちらも久しぶりの映画らしい力作であったと思います。監督の成り立ちもかなり違うのでそのあたりも選考の話題になりました。銀賞受賞の関根光才監督『生きてるだけで、愛。』私はとても評価する作品です。普段であれば観ることのない映画であったかとは思いますが主演の二人を決めたことで監督の思いが伝わってきます。息をするのもつらくなるような映画でした。最終審査に残った、岩切一空監督『聖なるもの』新人には思えないアイデア満載の作品でした。鄭義信監督『焼肉ドラゴン』舞台の映画化でしたが各審査員が絶賛していました。力強い作品だと感じました。上田慎一郎監督『カメラを止めるな!』この作品は今年の話作であることに間違いはないでしょう。製作予算と興行成績ばかりが話題になってしまいました。斬新でとても面白い作品でした。新人の監督や俳優さんにとっては諦めずに創り続けることの素晴らしさを改めて考えさせられる作品になったのではないのでしょうか。山中瑤子監督『あみこ』は監督が19-20歳の時に作ったと聞いて吃驚しました。今回は受賞には至りませんでした。次回作以降に大いに期待しています。私がこの賞の審査員を務めるのは9回目になりますが、こういう機会がなければなかなか触れることのない作品や監督と出会えることが、とても有意義な経験だと感じています。この中の何人もが日映協のプロデューサーと仕事すると考えるととても楽しみです。

審査員 孫家邦（リトルモア）

興行収入の低落と反比例して、今年の日映協映画は豊作だったように思う。審査対象の作品群も概ねその傾向の下にあり、力あるものが多かった。『あみこ』、『聖なるもの』、『ウルフなシッシー』、『枝葉のこと』など魅力的な自主製作映画に出会えたことも嬉しかった。『カメラを止めるな!』がプロデューサー賞に推挙されることが決まり、受賞二作品と『焼肉ドラゴン』、甲乙付け難い3作品が順当に残った。

『鈴木家の嘘』はある意味、奇跡の映画だ。最盛期を過ぎた撮影所システムが崩壊した後、かなりの本数の映画を製作してきた我々インディペンデントプロダクションは、それまで大手のスタジオが担ってきた「技術の継承」、「人材育成」にまでなかなか手が回らなかった。現場で経験を積んだ助監督を監督デビューさせるシステムをつくれなかった要因は色々ある。そのことについてはまた別の場所で。『鈴木家の嘘』の野尻さんは、数多くの有能な監督の下で働いてきた。助監督出身の彼が様々なことを「継承」してきたことは、作品を観れば明らかである。こんな助監督受難の時代を生き抜き成立したこの稀有なる映画を奇跡と呼ぶことに迷いはない。また惜しくも選にもれた『焼肉ドラゴン』はもうひとつの金賞映画であることを記したい。優れた脚本家が、優れた監督になりうることを鄭義信は証明した。さらにもうひとつ。助監督が不遇をかこった時代の裏側に自主製作映画出身の監督の活躍があった。その中軸を担った PFF からまた新しい才能が生まれている。『サイモン&タダタカシ』は異形の傑作だった。この破天荒な、「人間主義」などどこ吹く風、といった風情の活劇も機会があればぜひ観て頂きたいと、切に思う。

審査員 豊島雅郎（アスミック・エース）

今年度の新藤兼人賞（新人監督賞）対象作品数は過去最高となる185本でした。金賞は野尻克己監督『鈴木家の嘘』、銀賞は関根光才監督『生きてるだけで、愛。』となりました。私が審査委員として参画させていただいている直近7年間では今年ほど議論が白熱した年はなかったと思いますので、いろいろな意味で2018年が新人監督作品の大豊作な一年であった証だと考えます。そんな中での野尻監督と関根監督の栄えある受賞でもあり、なおのこと、お二方には心よりお慶びを申しあげたく存じます。また、最終選考に残った上田慎一郎監督『カメラを止めるな!』はプロデューサー賞に推す声が大きく金賞・銀賞からは漏れましたこと、および、鄭義信監督『焼肉ドラゴン』、岩切一空監督『聖なるもの』については最後の最後まで線上に残っておいりましたこともメンションさせていただきます。豊潤な新人監督作品のヴィンテージイヤーとなりました映画業界が、エンターテインメント産業の中核を担い、益々発展しますことを願ってやみません。

審査員 榊井省志（アルタミラピクチャーズ）

今年話題をさらった『カメラを止めるな!』を巡っては賛否両論あり、選考会も久々に侃々諤々の映画議論で多に盛り上がった。野尻克己監督『鈴木家の嘘』は、自らの体験に依るオリジナル脚本が高い評価を得た。助監督経験を活かした安定した演出力の光る堅実な作品で、それを支えた松竹ブロードキャストキャスティングのオリジナル映画プロジェクトも高く評価したい。関根光才監督『生きてるだけで、愛。』は、CM出身にも拘らず映画らしい出来栄の作品で、久々に日本映画に活を入れる肝の座った力溢れる作品となっている。私としては、魅力的なこの二作品が金銀に選ばれ納得のいく選考となった。また、最終まで選考に残った『焼肉ドラゴン』の監督鄭義信氏は既に劇作家、脚本家として高い評価を受ける実績の持ち主で敢えて授賞は若手監督としたが、やはり作品の秀逸さは際立つ。その他『愛と法』『ウルフなシッシー』『聖なるもの』『あみこ』が印象に残った。最終選考には残らなかったが、主にジャンルムービーで孤軍奮闘中の西海謙一郎、藤村亨平、谷本佳織、堀江貴大、今野恭成、安田真奈、小田学らの今後に期待したい。

審査員 山上徹二郎（シグロ）

新人監督の公開本数は増え続けており、従来の映画とはまた違った形での作品性も確実に向上しているように思う。主に劇映画における低予算での映画製作の弊害もありつつ、新人監督たちの尽きせぬ表現のパワーは瞠目に値する。上田慎一郎監督の『カメラを止めるな!』の他、岩切一空監督の『聖なるもの』や山中瑤子監督の『あみこ』など、新鮮な表現力を発揮した秀作が審査の最後まで残った。演劇の世界ではすでにベテランである鄭義信監督の『焼肉ドラゴン』は受賞こそ逃したものの、キャスティングが素晴らしく、映画の王道を行くような力強い作品だった。ドキュメンタリー映画では、遠藤協氏と大澤未来氏の共同監督による『廻り神楽』と戸田ひかる監督の『愛と法』が注目作として審査員の評価を得た。個人的には、塚原あゆ子監督の『コーヒーが冷めないうちに』は気になる作品だった。メジャーの製作・配給環境の中で、自らのこだわりを残しつつエンタテインメント作品に仕上げた力量と、また女性監督らしい柔らかな映像の感触もよかった。

金賞を受賞した野尻克己監督の『鈴木家の嘘』と、銀賞の関根光才監督の『生きてるだけで、愛。』は、2作とも初監督作品とは思えない演出とキャスティングのうまさ光る作品だった。作品は完成した時点ではなく、多くの人に見られることで人々の言の葉に触れて、優れた作品に成長する。この

2作品は、もっともっと多くの人に見てほしい、また見られるべき映画作品だ。関根監督は、今年もう1作『太陽の塔』というドキュメンタリー映画も公開している。また、『生きてるだけで、愛。』で主演を務めた趣里は、個人的には今年の主演女優賞の候補だと思う。

最後に、まだまだ女性監督の活躍の場とチャンスが限られているように感じる。撮影現場ではかなり女性スタッフの比率が増しているにも関わらず、女性監督の登場が少ないのは、目に見えないハードルが映画業界にも存在しているのではないかと。この新藤兼人賞でも、今後女性監督の登場を促すような方策を期待したい。

協同組合日本映画製作者協会 理事 岡田 裕 (アルゴ・ピクチャーズ)

今年の日本映画界の最大の話題は「カメラを止めるな!」の興行的成功であった。

製作費300万円で作られ、上映館が2館から300以上のスクリーンに拡大され、30億円を越す興行収入を上げ今も全国で上映中である。このことは50年に一度の映画界の快事である。何故このような現象が実現したのか。当然のことながら、作品自体が優れているという事。映画の基本設計図となる脚本が実に緻密に構成され、その中で登場人物たちの際立つキャラが短いセリフの中に巧みに表現されている。そしてその設計図をスピード感を持って映像化した演出に感動させられた。この大成功は、どのようなプロデュース力に導かれて実現したのか。私たち日映協は上記3人の方をこの映画のプロデューサーとして表彰することにした。ENBUゼミナールの市橋氏はワークショップで俳優を養成しながら300万円で映画を作る仕組みを考え、脚本・監督の上田氏はその仕組みにのっとり予算からスケジュールまで自ら管理し、アスミック・エースの豊島氏は、まだ2館の封切の時からこの映画の興行性を先取りしてメジャーの300スクリーン以上に拡大上映させた。御三人のプロの映画人としての眼力が奇跡的に重なり合っただけの成功だと思う。そして彼らを支えた何十人という若いスタッフキャストの真摯な努力が画面からにじみ出ているのも成功の背景にある。皆さん、おめでとう。

【2018年度選考対象となった新人監督作品 185本の中から審査員会にて選出・審議された監督/作品】

〈最終候補作品〉

鄭義信『焼肉ドラゴン』、上田慎一郎『カメラを止めるな!』、関根光才『生きてるだけで、愛。』、野尻克己『鈴木家の嘘』、岩切一空『聖なるもの』、山中瑤子『あみこ』

〈2次選考通過作品〉

遠藤協・大澤未来『廻り神楽』、小田学『サイモン&タダタカシ』、湯浅弘章『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』、塚原あゆ子『コーヒーが冷めないうちに』、戸田ひかる『愛と法』、大野大輔『ウルフなシッシー』、宅間孝行『あいあい傘』

〈1次選考通過作品〉

二ノ宮隆太郎『枝葉のこと』、今野恭成『心魔師』、春本雄二郎『かぞくへ』、谷本香織『花は咲くか』、小島淳二『形のない骨』、山本剛義『家族のはなし』、藤村明世『見栄を張る』、斎藤工『Blank13』、関根光才『太陽の塔』、長谷川康夫『あの頃、君を追いかけた』、山下智彦『三屋清左衛門残日録』、『三屋清左衛門残日録 完結篇』、武井祐史『赤色彗星倶楽部』、伊藤峻太『ユートピア』、渡辺智史『おだやかな革命』、かなた狼『ニワトリ★スター』、宮崎大祐『大和(カリフォルニア)』、波多野貴文『オズランド』、藤村享平『パパはわるものチャンピオン』、小野さやか『恋とボルバキア』、清原惟『わたしたちの家』、木村文洋『息衝く』